

しかも最近、本山、靈跡寺院において世襲、或いは有力者ファミリーによる独占化が進み、法類は血縁、経済力による勢力拡大の土壤となっている観がある。こうした状況は、法類のトップに学徳を兼備した指標となる人材の登用を妨げ、健全な機能を果たしているとはいえない。

法類が今後も存続するならば、法類は法類内の有能な人材の発掘に勤め、教育、扶助に尽力することが存在の大きな意義であろうと思う。法類寺院への他法類からの晋薫も拒むべきではなく、法類寺院間の統廃合は勿論のこと、法類の異なる寺院の統廃合が可能な場合には宗門、他の関係人と協力して善処すべきである。

もし、法類が宗門活性化のために機能しないならば、法類の存在意義は薄い。

(三) 僧侶についての過疎問題とは

一に意識の問題である。これは信仰心の問題といってもよいであろう。日蓮宗僧侶は江戸時代、制度の中に抱え込まれ、さらに明治以降世襲化の中で積極的な本化の宗風を失ったと言わざるをえない。これは教育の問題にも関わるが、寺の子として生まれた者が、一個の人間としていかに生きるか、仏教とは、僧侶とは何かを自覚して、住職となるのであれば、今後の日蓮宗の展望は開かれまい。

考慮すべき点をいくつかあげてみる。

イ、親は師僧になることはできない。これは釈尊以来の定則であったが、今日では破棄されてしまっている。師

日は本人が求め、決めるべきである。

ロ、現行の宗門教育の中で、教団論がまったくなおびりにされている。なぜ、日蓮宗が存在する必要があるのか、

日蓮聖人と、寺院と、宗門との不可分の関係などが論明されていない。ハ、布教の現場での生きた法華経に触れ、法華経を体得することができるよう、教育に留学制を取り入れて、各地方の法華経者に体験入門することも一案である。

過疎現象に対する日蓮的視座

最後に、こうした過疎現象を更により深く自らの課題として理解するためには、日蓮聖人の宗教的立場からのアプローチが必要であると考える。

日蓮聖人の宣教は、その信仰を確立する前提に、深い現実洞察と広い社会認識がある。その基準となるのが教機時国序(師)の「五義判」である。この五義判が仏教史上、他の祖師の教判と異なる最大の特徴は、基準を機根或いは時に限定することなく、広く多角的総合的な五つの範疇に因って人類の指導原理を究明していることにある。略述すれば次の通りである。

知教判は、宗教教理の比較究明

善悪、優劣等の検討

知時判は、教の弘まる時代の特性の検討

知国判は、教の依所としての国の歴史

知師(序)判は、教法の流通の歴史と、それを主体的に担う弘通者の資格の検討

このように、五義判は総合的な社会認識に立脚した教判であるといえる。こうした五義判によって、末法相應、最勝の法華経が決定されたのである。この五義を能判、

明鏡として、過疎問題を知時判、知国判に照らし合わせたとき、現在の宗門は「時を知らず、国を知らず」と言わざるを得ない。又法華経教理の根幹である「一念三千」にも、色心の相即として、内面と外界との干渉が明かされている。

「一念三千」の教理は、衆生の念々消滅する(内的)刹那の一念と(外的)三千世間の相関を示すものである。一念は三千世間の影響を受けて変容し、一念は三千世間に投影するものである。

この三千世間は、一念の迷悟を分別した十界、そしてその変化・活動態である十如と、その事相態である三世間(五陰世間・衆生世間・国土世間)により構成されているが、この中で、殊に衆生世間と国土世間が、一念を構成し、決定する要素として位置付けられていることが重要である。

これを今日的に解釈すれば、衆生世間は社会国家、国土世間は自然環境であろう。さすれば、社会、国家等の人為的営為、また気候、山川草木等の環境の変化も人心と相即相應すると理解される。

こうした理解に立って、事相としての過疎現象を捉えてみると、次のように整理できる。

a、宗教心の欠如による自然環境の破壊

b、国家・地方行政の施策の結果として

c、法華経者の主体的立場から

a、bは「立正安国」の精神に立脚したとき

に明確に理解されよう。

日蓮聖人は天変・地天等の自然災害を人心と相関するものとし、宗教心の荒廃、行政の糜爛等により災厄がもたらされるとしている。この原理で、現時を把握れば人類

のエゴ・物量的満足重視の心が水・土壌等の環境を汚染し、人体を蝕み、国土を浸蝕破壊して、仏身・仏国土を損っていると思われる。

この心が行政的にも第一次産業を軽視し、工業を過重視した政策は農地を不毛の荒野と化し、都市へ人口・機能の一極集中を招き、人々を地方から都市へと移住させる結果となった。その歪みとして都市近郊の土地の異常高騰があり、住宅難が引き起こされ、通勤地獄がある。

近代の高度成長時代においては、一極集中の体制を取るほうが経済的には優利であったが、それに反して人間を含む自然への配慮があまりにも足りなかったように考えられる。今後は、自然の中で生かされている人類という観点から、過疎問題にも取り組むべきではないか。

二十世紀の今日、フロンガス等の排気ガスによって異常気象が引き起こされ、森林の乱伐から緑地が砂漠と化し、洪水をおこし飢饉を招くことが地球規模で問題となっている。

こうした諸現象の一端に、過疎問題も位置付けられるのではなからうか。

cの法華経者としての過疎問題とは、法華経を信仰する異体同心の心地から、過疎地寺院の人々の苦悩を自らのものとして受け止め、過疎地寺院問題に取り組む過程を通して、広く社会問題に眼を開き、自らの信行を確立していくべきであると考ええる。

こうした法華経信仰者の姿勢が、日蓮宗過疎地寺院問題を打開し、宗門を明日に向けて一歩前進させることに続くものと信じ